

## Hardy と自然主義

### Thomas Hardy and Naturalism

中 村 志 郎  
Shiro Nakamura

#### § はじめに

島崎藤村 (1872-1943) は明治30年 (1897) に処女詩集『若菜集』で西欧ロマンティズムの精神を高らかに歌い上げ、そして明治39年 (1906) には小説『破戒』に於て西欧自然主義の筆法により時代の苦悶、魂の苦悩を、日露戦争後の昂ぶった日本人の前に突きつけた。僅か9年の間にロマン主義から自然主義まで、いわば19世紀100年間の西欧文芸思潮を駆け抜けた藤村は、良くも悪くも、明治日本近代文学が見せた急激な展開の、まさしく象徴的存在であった。

発表以来何かと批判非難を浴びてきたものの、我国の自然主義文学の先駆的作品たるを失うことのない『破戒』の第10章3-4に、次のような部分がある。

屠手の頭は油断を見澄まして、素早く細引を投げ溺む。撞と音して牛の身體が板敷の上へ横に成つたは、足と足とが引締められたからである。持主は茫然として立つた。丑松も考深い目付をして眺め沈んで居た。やがて、種牛の眉間を目懸けて、一人の屠手が斧 (一方に長さ四五寸の管があつて、致命傷を與へるのは是管である) を振翳したかと思ふと、もう其が是畜生の最後。幽な呻吟を残して置いて、直に息を引取つて了つた。——一撃で種牛は倒されたのである。(10章-3)

屠手の頭は鋭い出刃庖丁を振つて、先づ牛の咽喉を割く。尾を牽くものは直に尾を捨て、細引を持つものは細引を捨てて、いづれも牛の上に登つた。多勢の壯丁が力に任せ、所難はず踏付けるので、血潮は割かれた咽喉を通して紅く板敷の上へ流れた。咽喉から腹、腹から足、と次第に黒い毛皮が剥取られる。背と血との臭氣は斯の屠牛場に満ち溢れて來た。(10章-4)

丑松は考深い目付を爲乍ら、父の死を思ひつゞけて居ると、輒て種牛の毛皮も悉皆剥取られ、角も撃ち落され、脂肪に包まれた肉身からは湯氣のやうな息の蒸上るさまも見えた。屠手の頭は手も庖丁も紅く血潮に交れ乍ら、あちこちと小屋の内を廻

つて指揮する。そこには竹箒で牛の背を掃いて居るものがあり、こゝには砥石を出して出刃を磨いで居るものもあつた。赤い佐渡牛は引割と言つて、腰骨を左右に切開かれ、其骨と骨との間へ横木を入れられて、逆方に高く釣るし上げられることになつた。(10章-4)

種牛は最早足さへも切離された。牧場の草踏散らした雙叉の蹄も、今は小屋から土間の方へ投出された。灰紫色の膜に掩はれた臓腑は、丁度斯う大風呂敷の包のやうに、べろべろした儘で其處に置いてある。三人の屠手は互に庖丁を入れて、骨に添うて肉を切開くのであつた。(10章-4)

そして、小説としては藤村のこの最初の作品にあたかも呼応するかのやうに、Hardyの最後の長篇 *Jude* の I-10章には、主人公が新婚の妻 Arabella に言いふくめられて豚の屠殺に手を貸す場面がある。

The animal's note changed its quality. It was not now rage, but the cry of despair; long-drawn, slow and hopeless.

'Upon my soul I would sooner have gone without the pig than have had this to do!' said Jude. 'A creature I have fed with my own hands.'

'Don't be such a tender-hearted fool! There's the sticking-knife—the one with the point. Now whatever you do, don't stick un too deep.'

'I'll stick him effectually, so as to make short work of it. That's the chief thing.'

'You must not!' she cried. 'The meat must be well bled, and to do that he must die slow. We shall lose a shilling a score if the meat is red and bloody! Just touch the vein, that's all. I was brought up to it, and I know. Every good butcher keeps un bleeding long. He ought to be eight or ten minutes dying, at least.'

'He shall not be half a minute if I can help it, however the meat may look,' said Jude determinedly. Scraping the bristles from the pig's upturned throat, as he had seen the butchers do, he slit the fat; then plunged in the knife with all his might.

'Od damn it all' she cried, 'that ever I should say it! You've over-stuck un! And I telling you all the time ——'

'Do be quiet, Arabella, and have a little pity on the creature!'

'Hold up the pail to catch the blood, and don't talk!'

However unworkmanlike the deed, it had been mercifully done. The blood

flowed out in a torrent instead of in the trickling stream she had desired. The dying animal's cry assumed its third and final tone, the shriek of agony; his glazing eyes riveting themselves on Arabella with the eloquently keen reproach of a creature recognizing at last the treachery of those who had seemed his only friends. (I-10章)

これは Jude と Arabella の性格が対比的に描かれる場面でもあるが、この豚屠殺の場面と『破戒』の種牛屠殺の場面、この二つの場面の生々しい暗合に驚くことはない。Judeこそ Hardy の作品群中、最も自然主義的傾向の強い作品であり、そして醜悪なるものが人生の実相である限りそれから目をそむけず、それをしっかり見定めるよう主張するリアリズム、自然主義にとって、血のしたたる動物屠殺の場面はまさに究竟の材料であったからである。

一方フランスの代表的自然主義作家である G. Maupassant (1850-1893) の『女の一生』(Une Vie, 1883) にも似たような場面があって、それは雌犬の血みどろな殺戮である。

その時二人は子供の群のところに来てみた。司祭は何が子供達をそんなに面白がらせてゐるのかを見に行つた。それは産をしてゐる犬であつた。犬小舎の前に横になつて、痛めた腹を出しながら、仔犬共をしづかに舐めてゐる母犬のまはりには、すでに五匹の仔犬がはつてゐた。そして司祭が子供達の頭の上から覗いた時、母犬は苦しさに堪へられないやうに、ぐつと身體を伸した。とちやうど六匹目が現れた。

それを見ると男の子や女の子達は無暗に喜んで、「又生れた、又生れた！」と叫んで手を打つた。

子供等にとってはそれは全く純潔な自然の慰みものであつた。彼等は木から落ちる林檎を眺めるやうな調子で、これ等の仔犬の生れるのを眺めてみた。

僧院長トルビアクは非常にびつくりして一瞬間ちつと突つ立つたが、やがてむらむらと痲癩を起し、大きなかうもり傘をふり上げて、子供達の頭を力委せに撲り始めた。驚いた腕白共はわつと言つて一生懸命逃げ出してしまつたので、僧院長は苦しげに立ち上らうとしてゐる犬とばかり後に残つたが、犬が立ち上る前に彼は又もや滅茶苦茶にそれを撲りつけた。動物は逃げる術のない(鎖でつながれてゐたので)打撃の下にのたうちまはりながら、哀れげにキャンキャン鳴き立てた。たうとう坊さんの傘は折れた。するともう打つことができないので、今度は犬の上に躍りかかつて、全く忿怒に狂氣のやうになりながら、足の下に踏みつけたり踏みにじつたりした。その踏みつけた足の重みで最後の小さな一匹が、この世に迸り出た。それから司祭は、鳴きながら、眼も見えず、不器用にもう乳首を探してゐる仔犬共のまん中に、なほのたうち回つてゐる血のしたたる母犬のからだを、狂氣じみた靴の

踵で踏み殺した。(10章) (訳文については後記 Notes 末尾参照。——以下同断)

この自然主義の教科書とも言われる『女の一生』の中で Maupassant は、実は種牛や豚や上記雌犬の虐殺どころではなく、ヒロインの夫の不倫現場でのむごたらしい死をも、淡々と描く。

小舎は谷へ向つて轉り出した。落ちるに従つてますます速力を加へ、間もなく恐ろしい勢で丘をガラガラ下つて行つた。梶棒は地面の上にドタンドタンとつきあつた。そして小舎はさながら生き物のやうに、落ちて行く道のいろいろの障害物を跳び越えたり、それに衝突したりした。

溝の中にうづくまつてゐた老いたる乞食の頭の上を小舎ははずんで越えた。木の箱が頭の上を通り過ぎた時、乞食はその中から洩れて来る恐ろしく泣き叫んでゐる聲を聞いた。

いきなり何かに打つつかつて車輪が一つとれたので、小舎は横倒しになつたけれども、まだ止りはしないで、今は毬のやうに、或はまた土壘から根こぎにされて山の頂邊から投り出された家のやうにごろごろと轉がつて行つた。一番下の峡谷の縁のところ、圓を一つ描いて谷底に落ちて行つたかと思ふと、卵のやうにつぶれてしまつた。

小舎が自分の上を通つて、谷底の石に當つて砕けたのを見てゐた老いたる乞食は、早速荊棘の間を分けて下りて行つた。が、田舎者の用心深さで、直ぐに壊れた小舎のところには行かず、一番近い百姓家にこのでき事を知らせに行つた。

百姓達は乞食の示した場所に駆けつけて、こはれた小舎を持ち上げた。と、ズタズタになつた二つの死骸が中から出て來た。男は額が割れて顔全體が押しつぶされてゐた。女の顎ははづれて、ぶら下がってゐた。そして二人の折れた手足は、肉の下に骨がないやうにぐんにやりしてゐた。(10章)

車輪付きの羊飼小屋に入り込んで密会している二人を、かんぬき掛けて嫉妬の伯爵が小屋諸共に谷底目がけて転がり落とす場面なのである。

自然主義の血みどろの実例を以上並べてきたが、George Gissing は自然主義を定義するかのよう、「今日、芸術は悲惨の代弁者たらねばならない。というのは悲惨は現代生活の基調であるから」と断言し<sup>1)</sup>、社会の下層で貧困の毎日を暮らす人々の日常を赤裸々に描いた。また George Moore は「我々は必ずしもいわゆる不愉快なものを主題に選ぶわけではないが、然し我々は事物の根底に達するよう努めないわけにはいかない。そして生命の基底は精神ではなく物質であるから、人生を分析する者は早晚自分が、この感傷的現代が野卑と呼んでいるものを、きつと取り扱っていることに気づくことになる」と言つて<sup>2)</sup>、自然

主義が結局世の醜悪なるものを暴露することになる必然を、明確に立証している。かくしてこれら作家たちは、それが人生の実態ならば嘔吐を催させるような描写をも、これでもかと読者に突きつける。そうすることが自然主義が目指す一番の使命であった。そして Hardy もまた *Jude* に於て、明らかに自然主義小説家であった。

Hardy は確かに、小説家としてリアリストと呼ばれ、自然主義者とも言われている。しかし彼の小説群を一つ一つ見るならば、そのような呼称が果たして適切であるのか疑われてくる。成程 Hardy の文学を、一貫して農村崩壊の悲劇であると戦後いち早く主張した Douglas Brown のような評者もあり<sup>3)</sup>、事実19世紀前半、イギリス産業革命の成熟による産業構造の変革がもたらした農村人口の都市への流出、農業機械の導入、貧富の差の拡大は、Hardy の作品に常に見え隠れする問題点であった。しかしこのような、いわばリアリズムの味付けにもかかわらず、特に初期の小説 *Under the Greenwood Tree* や *Far from the Madding Crowd*、時には *The Return of the Native* ですら、のどかなロマンティシズムの気配が感じられる。それは主として作品全体の雰囲気を支える Wessex 民衆の生活と意見によるもので、彼らはたとえ貧しくても、不満に思わずいら立たず、春風駘蕩とはゆかずとも、斜には構えずムキにもならず、皮肉含みではあってもユーモアを忘れることがない。住んでいるところは桃源郷とは言えなくても、彼らは彼らなりに竹林の賢人なのである。良くも悪くも彼らがこのような満足主義を示す限り、Hardy の作品世界は、Gissing の描く都会的生活の陰惨さとは対蹠点にあり、矢張り牧歌的と言わざるを得ないものであった。

リアリズムの厳しさというより、むしろロマンティシズムののびやかさをその強い雰囲気としていた Hardy の初期から更に中期にかけての作品群であったが、1886年 *The Mayor of Casterbridge* に至って著しく色調が変わってくる。いわゆる Hardy の四大悲劇の時期である。勿論彼の世界観、芸術観にいくらか変化が生じて、作品制作の姿勢がどれだけか変異したからでもあるが、更に、当時フランスを中心に全欧を席卷していたリアリズム、自然主義の文芸思潮が、ロマンティシズムのいわばサンクチュアリとしての Wessex を題材にしてきた Hardy に対し、次第に影響を及ぼしてきたのだと判断せざるを得ない材料も、実は見出されるのである。以下 Hardy の作品中の自然主義的要素を取り上げながら、他からのこのような影響を逐次考えてみたい。

## § 1 遺伝の問題

*The Woodlanders* (1887) の Fitzpiers の本業は医師で、彼の顕微鏡の対物レンズの向こうにある脳髓のプレバレートは、それを覗いたヒロインだけでなく19世紀の読者たちすべてを驚かせたであろうが、作品でこのような医学的小道具を持ち出すに止どまらず、Hardy は遺伝現象に対して特別な関心を示した。そしてこの遺伝の問題は、彼の文学の重要要素

たるモダニズムの一つであると共に<sup>4)</sup>、実は19世紀自然主義の大テーマであった。

フランス自然主義の確立者 Emile Zola (1840-1902) は、周知の如く、クロード・ベルナールの『実験医学序説』(1865) とリュカ博士の『遺伝概論』(1847-50) で自然主義の理論武装をした<sup>5)</sup>。彼が28歳から53歳まで4半世紀をかけて取り組んだ『ルゴン・マカール叢書』を当初企画するにあたり、彼は「或る家系の中で血筋と環境の問題を研究すること。同一の父親から生まれた子供に、雑種や生活方法の違いから、違った情熱や性格を与えるところの秘められた作用を、一步一步辿ってゆくこと。……私の大きな仕事は、生粋の博物学者、生粋の生理学者であることだ。主義(王政とカトリシズム)を持つ代わりに私は法則(遺伝・先天性)を持つであろう。」と述べた<sup>6)</sup>。初めにルゴンと結婚し、後にマカールという愛人を持った女の、それぞれの男性との間に出来た5代にわたる子孫が、それぞれ引き継いだ遺伝因子をそれぞれの環境でいかに展開してゆくかというこの壮大な20巻の叢書の内、例えば『ナナ』(Nana, 1880) では、ヒロインの溺愛する息子は「どこの馬の骨だかわからない父親から遺伝した、何か悪質な病気の為らしい、悲し気なひいひいという泣き声」(13章)を上げ、彼女自身は、女優という名の高等娼婦として彼女に接するすべての男たちに対し、「自分が属する階級、赤貧洗うが如き人々や、社会から見捨てられた人々の為に復讐」を遂げる(13章)。かくして彼女は「チュイルリー宮の荘厳な宮廷を、さも満足気に足げにしているのがあった。これこそが、社会について彼女が考えていたことだった！これは彼女の復讐であり、血によって受け継がれた、一家の無意識な怨恨であった。」(13章)。「四、五代大酒飲みの続いた家系に生まれて、多年にわたる貧困と飲酒の遺伝のために血が汚され、それが彼女にあっては、セックスの神経的な変調という形で現われている」(7章)というヒロインについて述べられた新聞記事の一節は、単なる中傷、誹謗ではなく、それが事実であることを Zola は作品展開で実証してゆく。社会の醜悪、汚辱を生理学的に究明しようとする自然主義にとり、遺伝という科学による決定論はまさに究究の道具であった。

一方 Maupassant 『女の一生』のヒロイン・ジャンヌは、女癖の悪い放蕩な夫ジュリアンの横死によってようやく惨めな不幸を終わらせたかと思いきや、一人息子で今は彼女の唯一の生き甲斐であるポールが、やがて故郷を離れて町の学校へ出ると、ばくちと放蕩に明け暮れ、借財を作り、勝手に学校をやめ、情婦と暮らすようになる。今は貧困の老後を生きねばならぬヒロインが、夫の性癖をそのまま引き継いだような息子の放埒の後始末に心を砕く様を、作者は遺伝という恐ろしいあいにくで、これでもかと自然主義的止めを刺して描く。そのような中で読者が唯一救いを感じるとすれば、それは最後の一節「つまり世の中って、世間の人の思うように楽しいものでも不幸なものでもありませんね」が暗示するような、ヒロインの純真素朴な生き方からでしかないであろう。

ノールウェイの劇作家 Ibsen (1828-1906) の『人形の家』(1879) は、女性が人形でな

く人間として生きるという自己への義務を負っていることをヒロインに宣言させる社会的リアリズムの作品だが、この劇も「遺伝」に目配りして（第1幕）、その意味で自然主義作品であった。そしてHardyもまたこのような自然主義の筆法を踏襲する。1891年に雑誌発表された短篇“‘For Conscience’ Sake”は、遺伝現象が物語の舞台回しの役を演じている皮肉な展開の作品であるが<sup>7)</sup>、長篇でもとりわけ後期作品で繰り返し遺伝のことが言及されて、それは自然主義を思い合わさなければ、異様に感じられる程である<sup>8)</sup>。The Mayor of Casterbridge (1886) の第19章、Tess (1891) の5章、35章、47章、57章、そしてJude (1895) では、「結婚生活に適していない一族」(I-11章)という遺伝形質を負わされている主人公が、いとこのSueを愛するようになり、「血族結婚は不利な条件を倍加する」(II-2章)結果となる<sup>9)</sup>。Hardyにあっては、かかる遺伝現象への繰り返しの言及は、1865年のMendelの法則の発表など、彼が青年期に受けた科学的刺激に基づく彼の文学のモダニズムにもかかわっているけれど、同時にZola等フランス自然主義作家の遺伝へのこだわりや、次項のアルコール中毒と共に個人や社会の悲惨さの主要な要因と彼らが考えた遺伝へのその取り組み、こういったものの影響をもHardyが濃厚に受けた結果と見ざるを得ないであろう。

## §2 飲酒癖の問題

遺伝と無関係ではない飲酒癖も自然主義文学の重要なテーマであった。『ナナ』と並ぶZolaの代表作『居酒屋』(L'Assommoir, 1877)では、パリ下層労働者階級の飲酒癖による転落が執拗に描かれる。貧困、自棄、飲酒の悪循環の中で人物たちはアルコール中毒によって狂死し、悲惨のうちに餓死する。Zolaはこの小説の意図するところを要約して、「居酒屋を閉鎖し、学校を開け。飲酒癖が民衆をむしばんでいる。」と言った<sup>10)</sup>。アルコール中毒は今日ロシアで大きな社会問題であると言われるが、当時パリ労働者間にそれは猛威を振るって、その惨害をZolaは徹底的にこの作品で追求したのであった。そして実は、民衆の最も憂慮すべき問題として取り上げられただけでなく、民衆の生活の醜悪な実態を描く自然主義の重要な指標として、この飲酒癖、アルコール中毒はZolaによって採用されたのもであった。極めて類似したことがJoyceのDubliners (1914)でも見られる。これはJoyceの最も自然主義的な作品であるが、各短篇がイングランドの支配下にあるアイルランド民衆のやり場のない沈滞気分を描いて、彼らはしばしばアルコールに耽ることによってこの鬱屈から抜け出そうとする。しかしその飲酒が彼らを一層無気力にする。Joyceは作品でこのことを指摘すると共に、各篇の重い自然主義的展開の為の素材に、民衆の飲酒癖を利用していると言うことが出来るだろう。

そしてHardyの作品である。彼の初期の作品に於て酒は「いい酒」であることが多かった。Wessexの農民は酒を飲んで上機嫌になり、多少羽目を外すことがあってもそれはユー-

モアとペーソスの域内であった。*Far from the Madding Crowd* (1874) 36章, Bathsheba と Troy の結婚披露のパーティで、調子に乗った Troy が使用人たちに酒を悪強いし、皆が泥酔して眠り込んだあと、Oak の予告通り暴風雨になる。そして農場の収穫した麦の稲穂（にお）が危機に瀕するけれど、Oak の大奮闘でそれが救われるというくだりであるが(37, 38章)、これなどは「悪い酒」になりかかった局面が、Oak の誠実さやヒロインの懸命な協力、率直な感謝を引き出すという良い方向に転換される例である。*Under the Greenwood Tree* (1872) I 部 2 章で Dewy 家自慢のリング酒が紹介され、短篇“The Three Strangers” (1883) では当時の蜂蜜酒の製法が講釈されるが<sup>11)</sup>、こういった初期作品に於ける Hardy の酒へのこだわりは、Wessex の民俗、風習を好意とユーモアを以て示すための方法であって、自然主義のアル中処理とは全く異なるものであった。後期に入った *The Woodlanders* (1887) でさえ、主人公 Giles Winterborne がリング酒作りの作業をして、それのおいさを全身より発散させながら現れるとき、作者は彼を「秋の兄弟’Autumn’s very brother’」と呼び、そこでの‘cider’はまぎれもなくプラスのイメージを帯びている (28章)。しかしこの作品の前年に発表された *The Mayor of Casterbridge* (1886) に於て酒は明らかに自然主義の酒であった。この小説の発端は主人公 Henchard が、緑日に立った市で日頃の不満から泥酔し、酔った勢いで妻子を競りにかけて売り飛ばすことから始まる。彼が酔いから醒めて我に帰り、以後21年の禁酒の誓いを立てて、その間の勤勉努力の結果、遂に推されて田舎町の町長になるということ自体が、飲酒癖の害毒を世に訴える自然主義の主張を裏側から立証するものであった。そして Henchard が新しい状況に出くわして自暴自棄になり、再び飲酒に耽るようになったとき(32章)、彼のその後の転落は自然主義的に、いわば約束されたようなものであった。

Tess の父親 John Durbeyfield もアル中と言ってよい飲んだくれで、物語はこの男の千鳥足の描写から始まっていた。沢山の幼い子供をかかえながら村の飲み屋でとぐろを巻いて気炎を上げ、しがない行商のかせぎを飲み尽くす様子は、Zola の人物がパリの場末の居酒屋で管を巻く姿と同じ飲酒癖の悲劇である。前夜の泥酔の為に仕事に出られぬ父親に代わって朝まだき、町まで荷馬車を御して行った Tess が、暗がりの路上の事故で一家の大事な財産である老馬を死なせたことが彼女の不幸の始まりだとすれば、父親の「悪い酒」こそがこの悲劇の根本原因なのであった。Henchard の場合同様この John についても、Hardy は自然主義の飲酒のテーマを意識していたのではないだろうか。

しかし自然主義を間違いなく Hardy が意識していたのは Jude の酒であった。Jude には二つの強い性癖がある。一つは女性の魅力に著しく弱いこと、もう一つは酒の誘惑に無力であることだった。前者については作者自身の性格の投影でもあったのだろうが、とにかく彼は‘a ridiculously affectionate fellow’ (II-2章)、愛する者を求めるほどく惚れっぽい性格だと説明される (II-4章)。肉親のえにしに薄かった Jude が女性のやさしさ、愛



に焦がれ、とりわけ年上のいとこ Sue に対し、彼が幼くして死別した母親のイメージを重ね合わせたかのように、想いを寄せるのは十分理解出来る性格設定である。一方飲酒癖の方は、20歳前後、Arabella とのやみくもな結婚とその破綻のあと、彼にはもう酒に浸って苦しみを忘れる性癖が現れている。

What could he do of a lower kind than self-extermination; what was there less noble, more in keeping with his present degraded position? He could get drunk. Of course that was it; he had forgotten. Drinking was the regular, stereotyped resource of the despairing worthless. He began to see now why some men boozed at inns. He struck down the hill northwards and came to an obscure public-house……

Staggering homeward late that night, with all his sense of depression gone, and his head fairly clear still, he began to laugh boisterously, and to wonder how Arabella would receive him in his new aspect…… (I-11章)

ソフトで内向的な人間が障害にぶつかったとき、飲酒に耽溺して悩みを忘れようとするのは日常的に見られることだが、Jude は29歳の死に至るまで断続的にこの性癖にとりつかれ、その為心身共にぼろぼろになってゆく。このまさに Zola 的世界を、Jude はイギリス南部 Wessex の各地を転々と流れ移りながら現出しているのである。

### §3 都市窮民の問題

Victor Hugo は *Les Misérables* (1862) の中で「みじめなる人々」をあるがままに描くため、パリの暗黒街にうごめく犯罪と下層階級、親も家もない浮浪児群、彼らの間に使われる驚くべき隠語等々を膨大精緻に論述した。このことはこの大長篇の中で、Hugo が進歩を信じ人類の善意と神の導きを信仰していた浪漫的理想主義者でありながら、同時にすでに Balzac (1799-1850) に始まる当時のフランス・リアリズムにもいわば接点を持っていたということであろう<sup>12)</sup>。そしてその後を引き継いだかのように Zola がパリの労働者階級を作品の主人公の位置に据える。かつては小説の中心人物になることのあり得なかったような階層を『居酒屋』では主人公に仕立て上げ、彼らの代々伝え継いできた遺伝とアルコールによる転落を、科学者、生理学者の目で観察し、冷静な筆で描出する。平凡平均の読書階層 (reading public) があずかり知らぬ階級の生活、生態を赤裸々に、執拗に、彼らの醜悪な営みにも目をそむけることなく、Zola は描いたのであった。

一方 Hardy は通常、一般読書階層と同じ階層の人間を主人公として登場させたが、実は彼の Wessex 小説を支える人物はこのような主人公だけではなく、土地に深く根をおろし

ている農民、民衆もそうなのであった。そしてこのような民衆は先にも触れたように、初期中期の作品では、裕福であるわけでは決してないのに独特の満足主義により、気持ちにゆとりを持って生活している。それ故彼らがかもし出す雰囲気は、のどかで牧歌的なものになる。しかし後期の作品の民衆には必ずしもどかとは言えない面が見えてくる。Zolaの世界には争いや暴力や子女虐待があり、うわさと大ぼらと中傷があり、浪費乱費と吝嗇があり、とばくと淫蕩と肉欲があり、泥酔と倫理的麻痺、無気力と自墮落があり、逸樂猥雑と不潔老醜があり、詐取横領と裏切りがあり、露悪と倒錯があり、要するにそれは悪臭に満ちた醜悪の世界である。そして *The Mayor of Casterbridge* で Hardy が描いた Mixen Lane の住人 Jopp からも実直ではなく屈折していて、Hardy の人物一般には珍しく陰険なイメージがあった。田舎町の一角を占めるこの地区とその住民のことを作者は次のように書く。

Mixen Lane was the Adullam of all surrounding villages. It was the hiding-place of those who were in distress, and in debt, and trouble of every kind. Farm-labourers and other peasants, who combined a little poaching with their farming, and a little brawling and bibbing with their poaching, found themselves sooner or later in Mixen Lane. Rural mechanics too idle to mechanize, rural servants too rebellious to serve, drifted or were forced into Mixen Lane.

The lane and its surrounding thicket of thatched cottages stretched out like a spit into the moist and misty lowland. Much that was sad, much that was low, some things that were baneful, could be seen in Mixen Lane. Vice ran freely in and out certain of the doors of the neighbourhood; recklessness dwelt under the roof with the crooked chimney; shame in some bow-windows; theft (in times of privation) in the thatched and mud-walled houses by the willows. Even slaughter had not been altogether unknown here. In a block of cottages up an alley there might have been erected an altar to disease in years gone by. Such was Mixen Lane in the times when Henchard and Farfrae were Mayors. (36章)

悪徳、向こう見ず、汚辱、盗み、殺害——このような忌まわしいイメージの言葉は従来のどかな Wessex の牧歌調には無縁のものであった。この Casterbridge の場末のスラム街に潜む Jopp の樓家に、他に行き所なくなった Henchard は間借りする (31章)。そしてこの落ちぶれた中年の Henchard から羽振りのいい青年 Farfrae に乗り換えた Lucetta を槍玉に挙げて、'skimmity-ride' を企てるのも Jopp を始めこのスラム街の住人たちであった。Hardy は「みじめな場末」'sad purlieu' (31章) やそこに住み着く窮民たちを、

この作品で初めて扱った。

Tessの家は、昔はSirの称号を許された土地の名家であったが、今は赤貧洗うが如き暮らしをWessexの片田舎で送っている。この一家やその周辺の農民たちは、フランス自然主義的都市窮民とは違うが、同時にそれまでのHardyの作品の農民とも一線を画する矢張り自然主義的民衆である。Tess50章末から51章冒頭にかけて、貧しい農民が例えば三代限りの土地借用権が切れたあと、移動農業労働者とか都市工場労働者という流民になって次々と流出してゆく農業世界の構造的変化のことが述べられているが、産業革命の進展は都市窮民だけでなく、経済発展に伴う貧富拡大による農村窮民を生み出し、このような展開の中でこの作品はすでに自然主義のわく組みを与えられていた。そして元々沈没寸前であったダービーフィールド号の曲りなりにも船長だった父親の死後、立ち退きを迫られ受入れを拒まれる一家の悲惨は、Tessの最後の転落に直結する原因となったが、言うならばFlintcomb Ashでの彼女の季節労働者としての苛酷な労働の日々は、19世紀農業社会が、同じ作品のTalbothays酪農場ののどかな牧歌的風景ばかりではなく、自然主義的舞台をも提供するものであったことを示している。

Zolaの『ナナ』のヒロインは、約束の一万フランを持参しなかったミュファ伯爵を口汚くののしる。

伯爵は明後日になれば金ができるとくどくど弁解し始めた。だが、彼女はびしゃりと相手をさえぎって言った。

——それじゃ、あたしの支払期限はどうなるのさ！男が金も出さずに、のこのここにやって来るあいだに、あたしはつかまっちゃうじゃないの……なんてざまなの、とくと自分の顔でも見てみるがいいわ！あたしがあんたのその格好に惚れてるとでも思ってるの？あんたみたいなご面相をしてたら、金で女にがまんしてもらうものさ……まったく、なんてこったろう！もしも今晚一万フランもって来なけりゃ、小指の先だってなめさせやしないから……ほんとに、さっさと自分の山の神のところへ帰ってちょうだい！（13章）

まさしく金の切れ目が緑の切れ目であり、都市窮民を代表するこの一面気のいい善良なヒロインの、いざとなると酷薄を極める人間性を上記引用は描いているが、この女傭という名の高等娼婦が思い起こさせるHardyの人物はJudeのArabellaである。死の病床にある夫Judeをよそに、いんちき医者Vilbertとの彼女の猥雑なやりとりは、これが本当にHardyの筆かと思わせる程の自然主義の筆致であった。

'I'll bring it to you here in the passage,' she said. 'There's nobody but me about the house to-day.'

She brought him a bottle and a glass, and he drank. Arabella began shaking with suppressed laughter. 'What is this, my dear?' he asked, smacking his lips.

'O—a drop of wine—and something in it.' Laughing again she said: 'I poured your own love-philter into it, that you sold me at the Agricultural Show, don't you remember?'

'I do, I do! Clever woman! But you must be prepared for the consequences.' Putting his arm round her shoulders he kissed her there and then.

'Don't, don't,' she whispered, laughing good-humouredly. 'My man will hear.'

She let him out of the house, and as she went back she said to herself: 'Well! Weak women must provide for a rainy day. And if my poor fellow upstairs do go off—as I suppose he will soon—it's well to keep chances open. And I can't pick and choose now as I could when I was younger. And one must take the old if one can't get the young.' (VI-10章)

貧困、打算、無知、酷薄——人間のこの上ない醜悪な営みを描いていて、それはまさに自然主義的止どめを刺すかのようなのである。*The Mayor of Casterbridge* の Jopp ら Mixen Lane の住人たちは作品全体から言えば周辺の人物群であったが、Arabella はこの小説の中心人物の一人である。それを単に作品展開の為の敵役としてではなく、個性を持った一つの性格として Hardy は赤裸々に描く。そしてその筆法はまさしく自然主義が都市窮民を描くときのそれであった。

#### § 4 影響関係の吟味

以上主としてフランス自然主義文学を検証しながら、Hardy の後期小説の自然主義的要素を見てきた。本項では更に一步進めて、両者間に影響関係のあることの実証を試みたい。

前項末の *Jude* の場面のあと、やがて主人公の臨終のときが来る。折しも彼が長年入学を夢みてきて果たされることのなかった Christminster (Oxford) 大学の記念祭の若々しい歓声が病床まで流れてくる。

As soon as he could speak he murmured, his eyes still closed: 'A little water, please.'

Nothing but the deserted room received his appeal, and he coughed to exhaustion again—saying still more feebly: 'Water—some water—Sue—Arabel—'

la!

The room remained still as before. Presently he gasped again: 'Throat—water—Sue—darling—drop of water—please—O please!'

No water came, and the organ notes, faint as a bee's hum, rolled in as before.

While he remained, his face changing, shouts and hurrahs came from somewhere in the direction of the river.

'Ah—yes! The Remembrance games,' he murmured. 'And I here. And Sue defiled!'

The hurrahs were repeated, drowning the faint organ notes. Jude's face changed more: he whispered slowly, his parched lips scarcely moving:

*'Let the day perish wherein I was born, and the night in which it was said, There is a man child conceived.'*

('Hurrah!')

*'Let that day be darkness; let not God regard it from above, neither let the light shine upon it. Lo, let that night be solitratry, let no joyful voice come therein.'*

('Hurrah!')

*'Why died I not from the womb? Why did I not give up the ghost when I came out of the belly?... For now should I have lain still and been quiet. I should have slept: then had I been at rest!'*

('Hurrah!') (VI-11章)

そして『ナナ』のヒロインの死の場面はこの *Jude* の場面と酷似している。

ナナが死んだ！それはだれにとってもショックだった。ミュファは、言葉もなくベンチに引き返して、ハンカチで顔をおおった。他の者たちは声高に何やらさげんでいた。だが、彼らの言葉もたち切られた。新しい一団がわめきながら通りすぎていったのだ。

——ベルリンへ！ベルリンへ！ベルリンへ！（14章）

Zolaはこの作品最後の場面で幾度も——ベルリンへ！ベルリンへ！を繰り返す。時は1870年7月、普仏戦争開戦の夜である。パリの市民は愛国的熱狂に駆られた群衆となり、巨大な流れとなってパリの街路を押し進みながら、ベルリンへの進軍を絶叫する。この宣戦布告は鉄血宰相ビスマルク率いるプロシア軍によるフランスの惨めな敗北で翌年けりが

つくが、いずこも同じ開戦時の民衆の高揚した気分、興奮した群衆の叫びを、かつて美貌を誇った女優ナナの、天然痘の腐臭ただよう悲惨な死の挽歌として、作者は採用した。高揚、熱狂の叫びが一方の惨めさ醜悪さを一層際立たせる効果を発揮するようにと。そして Hardy は Jude の死の挽歌に Oxford 大学記念祭の学寮対抗ボート・レースの歓声を採用した。少年の日から想い焦がれた Oxford への向学の夢をすでに絶たれ、病を得て不遇の29年の生涯を今終わろうとする主人公の哀れさを、これ以上はなく際立たせる効果音でそれはあった。1895年自らの最後の長篇を締めくくるに当たって、Hardy は1880年のフランス小説のラスト・シーンを思い浮かべていた、或いはそこから無意識の暗示を得ていた、ということではないだろうか。

Hardy は作家一般の常として他からの影響、とりわけ他の作家からの影響、借用を認めることを拒んだ。然し作家であると同時に勤勉な読書家であった Hardy は、たとえ自分では意識していない場合でも、他作家の影響を受けていることが少なくなかったと思われる。例えば *The Mayor of Casterbridge* (1886) と Hugo の *Les Misérables* (1862) の影響関係は否定し難いものであろう<sup>13)</sup>。ところで *The Woodlanders* 28章でヒロイン Grace は、医師 Fitzpiers と結婚したあと早々に夫の不行跡を知る。彼は結婚前、Grace と恋仲にありながら村の遊蕩娘 Suke と関係があったが、更に新婚旅行から帰って間もなく村のお邸の未亡人 Mrs. Charmond とわりなき仲になって仕舞う。この二人は互いの無為無聊の生活の中で刺激を求め合い、不倫の恋をむさぼり求める。或る日 Grace は彼女の雌馬に乗って夫が恋人の邸にいそいそと出かけて行くのを見送る。

Grace was amazed at the mildness of the anger which the suspicion engendered in her. She was but little excited, and her jealousy was languid even to death. It told tales of the nature of her affection for him. In truth, her antenuptial regard for Fitzpiers had been rather of the quality of awe towards a superior being than of tender solicitude for a lover. It had been based upon mystery and strangeness — the mystery of his past, of his knowledge, of his professional skill, of his beliefs. (28章)

驚いたことに、彼女には嫉妬心もまた激しい怒りも湧いてこない。むしろ無感動、‘apathy’ とさえ言える自分の精神状態を彼女は不思議に思う。元来二人の間にあったものは愛ではなく、今結婚してみて、夫婦の間に生まれるべき相互に助け合う信頼感が芽生えてくることもない。かかる状況では、夫の本性を知っても、自分にとって夫は無縁の人のように見えるばかりだと Hardy は説明する。この Grace の心理は、読者にとって理解出来るようでもあり、また何となく霧のかかったような気分させられるところであるかもしれない。

しかしこのヒロインの心理には先例があった。Maupassantの『女の一生』のヒロイン・ジャンヌは結婚早々夫ジュリアンが、彼女が実家から伴ってきていた奥女中に手をつけて、子供まで産ませたことを知り絶望を味わったのであったが、更にやがて、家族ぐるみで付き合っている伯爵家の夫人と夫が深い仲になっていることを知る。それはこの二人の馬が(こちら馬が絡むが)、林の中につながれ乗り捨てられているのを彼女が発見したときで、いかに深窓育ち、世間知らずのジャンヌでも、その意味がわかったのであった。

最初の戦慄が過ぎると、ジャンヌはほとんどまた元の冷淡に立ち戻つて来た。嫉妬も憎しみも感じないで、ただ侮蔑の念のみが湧き上がつて来た。夫のすることはいかなることでもうジャンヌを驚かせはしないから、ジュリアンについては少しも考へなかつたが、しかしその友をも、同時にその夫をも欺いてゐる伯爵夫人の二重の裏切りは、我慢がならなかつた。ありとあらゆる人間は、ことごとく不義で、不眞實で、虚偽だつたのだ！ジャンヌの眼は涙で一ぱいになつて来た。かうした思違ひを後悔するのは、時によると、死ぬほど悲しいものだからである。ジャンヌは、しかしこのことは何も知らないふりをしてゐよう、そして今後はポールと両親とを愛するだけで、誰に對しても愛の心を閉ざし、ただおだやかな顔をして他のことにすべて堪へて行かう、と決心した。(9章)

友人である自分と、自身の夫である伯爵を裏切っている伯爵夫人にこそ我慢ならぬものをジャンヌは感じたが、夫へは嫉妬も憎しみも感じない。侮蔑の念のみであったと作者は言う。この心理を Maupassant は Hardy 程には細かく分析していないが、二人のヒロインの心理の根底には明らかにつながるものがある。Hardy が作品展開上重要な意味のあるこの Grace の心理を処理するに当たり<sup>14)</sup>、フランス自然主義の教科書とも言うべきこの小説から、意識してか無意識のうちにか、影響を受けていたと考えてよいのではないだろうか。

実は *The Woodlanders* には『居酒屋』も深くかかわっているように思われる。Zola のこの小説の主人公ジェルヴェーズには、彼女の転落の原因となる二人の「夫」のほかに、グージェという陰に日なたに彼女を助け、献身の愛を尽くす男がいる。と言えば Grace のために尽くして最後に自己犠牲の死を遂げた Giles Winterborne が思い浮かぶが、これだけなら Giles には *Far from the Madding Crowd* (1874) の Gabriel Oak という同系列の先輩がいて、この二人は言わば Hardy が最も得意とする男性タイプであり、そしてこの Oak なら『居酒屋』(1877) のグージェより3年前に生まれていた。問題は人物の類似ということだけではないのである。『居酒屋』のヒロインは最初の夫に他の女と逃げられたあと、二度目の夫と結婚し、子どもうけているが、横暴で向こう見ずの最初の男がふと戻って来るのではないかといつも怯えている。第二の夫にはすでに飲酒癖が始まっていて、彼女が

本当に信頼出来るのは、彼女を秘かに愛し、常に援助の手を差し伸べてくれるグージェである。

春がくると、ジェルヴェーズはグージェの所へ逃げてゆくようになった。椅子に腰掛けてなにか物思いにふけると、すぐに最初の情夫のことがきつと頭に浮かんでくるのだった。彼がアデルと別れ、下着を古いトランクの底につっこみ、馬車にのせて帰ってくるように思えた。外出した日には、通りで突然、愚かな恐怖におそわれた。背後にランチェの足音が聞こえたように思え、両手で胸をつかまれる感じを想像するとふるえて、とてもふりかえる勇気が出なかった。彼はきつとあたしをねらっているんだ。いつか午後に出会おうだろう。そう思うと冷や汗が出た。昔、ふざけてやったように、彼はきつと耳にキスするのだから。彼女のこわかったのはこのキスであった。それがもういまから彼女をつんばにし、耳鳴りをおこさせ、そのため、はげしく鼓動する心臓の音も聞こえないくらいだった。一度こうした恐怖にとらえられると、鉄工場が彼女の唯一の隠れ家であった。そこで、グージェにかくまってもらっていると、もとのように平静になり、にこやかになった。グージェの音のひびく鉄鑪<sup>てつろ</sup>は彼女の悪夢を追い払ってくれるのだった。(6章)

このエピソードは *The Woodlanders* のヒロインの状況と酷似している。Mrs. Charmond と外国へ駆け落ちしていた夫 Fitzpiers から帰国するという身勝手な知らせが届き、神経症になる程この夫を恐れている Grace は、夫が実際に戻って来た馬車の音を聞いたとき、遂にたまらず家を飛び出し Giles が住む山小屋へ駆け込んで来る(40章)。前述のように、夫の浮気に対する Grace の無感動無関心の心理を Maupassant から借用したのかもしれない Hardy は、駆け落ちした夫の戻って来ることへの怯えの状況については Zola からヒントを得たのではないかと思われるのである。

もう一点この猷身的グージェについて取り上げてみよう。彼は鉄工所の工具として優れた技能をもっていて、フィフィーヌという重い鉄槌を自由に扱うことが出来る。そして彼の仕事振りの見事さをヒロインはうっとり眺める。

この若者の、仕事のみごとな男っぷり！彼は炉の大きな炎を全身に受けていた。低い額のうえに縮れる短い髪や、輪をなしてたれた美しい黄色のひげが燃えたち、顔全体を金の糸で照らし、かけねなしの黄金の顔をつくりだしていた。それに円柱にも似た、子供のように白い首、女ひとり寝られるほどの広い胸、美術館の巨人を写したような隆々とした肩や腕。彼がおどりあがると、筋肉が盛りあがり、皮膚の下で肉の山がうねってはこわばるのが見えた。肩も胸も首もふくれた。彼は自分のまわりに光をなげ、神のようにみごとな全能の存在になった。もう二十回もフィ



フィーヌを打ちおろしていた。鉄を見まもり、ひと打ちごとに息を吸い、額には大きな汗のしずくが二つ流れているだけだった。彼は数えた。二十一、二十二、二十三。フィフィーヌは落着きはらって貴婦人ぶった上下運動のお辞儀をつづけていた。  
(6章)

そしてこれと呼応するかのような、先にも触れた場面が *The Woodlanders* にある。

He looked and smelt like Autumn's very brother, his face being sunburnt to wheat-colour, his eyes blue as corn-flowers, his sleeves and leggings dyed with fruit-stains, his hands clammy with the sweet juice of apples, his hat sprinkled with pips, and everywhere about him that atmosphere of cider which at its first return each season has such an indescribable fascination for those who have been born and bred among the orchards. Her heart rose from its late sadness like a released bough; her senses revelled in the sudden lapse back to Nature unadorned. (28章)

グージェの鉄槌を振るう姿がヒロインをうっとりさせたように、「秋の兄弟」Gilesの田園自然の権化とも言うべき雰囲気はGraceの内に潜む野性をよみがえらせて、これはこの小説の重要な変曲点なのである<sup>15)</sup>。一方は職工、他方は農夫の違いはあるが、ここには共通して労働する姿の輝きがある。実はグージェは『居酒屋』でZolaが肯定的に描いた数少ない人物であった<sup>16)</sup>。この作品に登場する男たちはほとんどが居酒屋にたむろして泥酔し、怠惰の日々を過ごし、貧しい暮らしの中で妻子に暴力を振るう労働者であり、一方女たちは貧困の中で猜疑心と嫉妬心を燃やし、他人のうわさと中傷に熱中しながら、自らの猥雑な男女関係には無感覚な女工や洗濯婦である。このためにVictor Hugoさえ『居酒屋』を労働者を侮辱するものと批判した<sup>17)</sup>。もとよりZolaは自然主義者として社会の実態をそのまま提示することが第一義であったのであり、侮辱など思いもかけぬことであった。そして実際Zolaはグージェという居酒屋の安酒に毒されることのない実直誠実な熟練工の見事な姿をここで示しているのである。そこには「秋の兄弟」の登場のような、作品の重要な転換点としての構成上の有機的な機能はないかもしれないが、素朴純粋な献身的男性二人のさわやかな労働の姿には、強い類似が感じられるのである。

*Jude* に出てくるLittle Father Timeという少年は、奇妙でリアリティに欠けているというのが一般に言われているところである。David Cecilは「比喩の場でのみ存在し、自らの独立したいのちを持った人間ではない。」と言い<sup>18)</sup>、A. Guerardは「現代の生きたくない意志の象徴であり、このような象徴的機能以上のものでなく、作者の理論過剰による操り人形である。」と言う<sup>19)</sup>。確かにマルサスの論理による幼い弟妹の殺害というような、い

かにも19世紀自然主義的なテーマの Hardy 的実践が、いかにも生硬にこの少年に関して成されているが、これとても或る程度は先例と言ってよいかもかもしれない人物が『ナナ』の中に登場していた。それはナナが産んだ、父親が誰とも知れぬ息子ルイであるが、ナナのいのちを奪った天然痘はこの影の薄い子供からの感染によるものであった。

病身で、ひどくひねこびて、陰気くさい顔つきをした子供だった。要するに産んでもらいたくなかった、哀れな赤ん坊のひとりだったのだ。

—あの子も死んだほうがしあわせね。とブランシュが言った。(14章)

これは Little Father Time のイメージと全く重なり合うと言ってもよいような叙述である。Hardy は時代に先行した、いささか観念過剰の幸せ薄い子供、Jude と Sue が Arabella から押しつけられる少年を登場させるに当たり、そこには気まぐれな母親に時々ヒステリックに溺愛されることはあっても、ずっと親戚に育てられた、哀れな孤独の少年ルイというプロトタイプがあったように思われる。

Jude が死んだ直後の描写も、いかにも自然主義的方法で行なわれている。街に出歩いて軽口をたたいたあと家に戻った Arabella は、玄関先で Jude の石工仲間たちに出会って、ボート・レース見物に誘われる。ちょっと様子を見てみると部屋に上がった彼女は、夫がすでにこと切れていることを発見する。

After her first appalled sense of what had happened the faint notes of a military or other brass band from the river reached her ears; and in a provoked tone she exclaimed, 'To think he should die just now! Why did he die just now!' Then meditating another moment or two she went to the door, softly closed it as before, and again descended the stairs.

'Here she is!' said one of the workmen. 'We wondered if you were coming after all. Come along; we must be quick to get a good place. ...Well, how is he? Sleeping well still? Of course, we don't want to drag 'ee away if ——'

'O, yes—sleeping quite sound. He won't wake yet,' she said hurriedly.

.....  
'O, I say—how jolly! I'm glad I've come,' said Arabella. 'And—it can't hurt my husband—my being away.' (VI—11章)

Hardy は Arabella の言動に詠嘆しているのでもなく、批判非難しているのでもない。淡々と描いて、然しこれでもかとその人間性をえぐり出す。人間の持ち得る酷薄さの限りをこれでもかとはばかり読者の前にさらけ出す。自然主義の描こうとする醜悪さ、自然主義自体

が持っている恐ろしさ、ここに極まれりと言って過言ではないであろう。

ベルリンへ！ベルリンへ！という、街を流れ歩く群衆の叫びが幾度も窓から入って来るナナの死の床へ、かつてかかわりのあった男たちは感染を恐れて近寄らない。男たちの卑怯さ、臆病さをあざ笑う女たちも、一瞬ナナを思い起こし、その栄光のときを偲ぶことはあっても、またそれぞれの関心に戻り、とりわけ起こったばかりの戦争に話題が集まる。ときには傍らの死者のことを忘れたように、議論し言い争う。その中で一人、ナナの死に強い衝撃を受けて枕元に坐っているのは三日三晩看病していたローズ、皮肉にも彼女は生前のナナのライバルで、仲よしとは決して言えない間柄の女であった。やがて腐臭の立ちこめていることに気付いた女たちは追われるように病室を出て行く。この辺り Zola もまた、死と向き合わされた人間性の酷薄さを赤裸々に描くことを意図しているのであろうが、実はそのあと部屋に一人残されたナナの死体の描写の恐ろしさはまさに息を呑ませるものであった。Flaubert は *Madame Bovary* (1857) でヒロインの服毒死の断末魔の苦しみを、この上ないリアリズムで描き (第3部8章)<sup>20)</sup>、Zola は『居酒屋』でアル中クーポーの精神病院でのすさまじい狂乱死をこれまた執拗なリアリズムで描いたが(13章)、遺骸の描写としてはナナのそれ程に恐ろしいものの例を他に知らない。

彼女は部屋を出て、とびらをしめた。ナナは、ろうそくの光をあびて、顔を上にむけ、ただひとり残り残されていた。それは、クッションのうえに投げ出された骸骨、血と膿の堆積、腐肉の塊であった。天然痘の膿疱がすきまもなく顔中をうずめていた。しかも、それは色あせてしぼみ、泥のような灰色を呈していて、もはや目鼻立ちさえ見分けがたいほどくずれてぶよぶよになった顔の上では、土にはえたかびのように見えた。左の目は、どろどろの膿のなかにすっかり見えなくなり、右の目は半ば開いていたが、おちくぼんで、黒く腐った穴のようだった。鼻からはまだ膿が流れ出していた。片方の頬から口にかけて、赤みがかったかさぶたがひろがり、口をひんまげて、ぞっとするような笑顔をつくっていた。そして、このおそろしいグロテスクな死に顔には、髪が、あの美しい髪が、今もなお太陽の輝きを失わずに、黄金の川のように流れていた。ヴィーナスはいま腐りつつあった。あたかも、彼女がどぶ川のなかの腐肉からとって来た病菌、彼女が多くの人々を毒したあの病毒が、彼女の顔にのぼって、それを腐敗させたようだった。(14章)

ボバリーとクーポーの死に際、そしてナナの遺骸、これらフランス小説の描写に比べると *Jude* のそれらはいかにも穏やかであった。Hardy が *Jude* の結末で力を入れたのは主人公の死に際や遺骸の状態の恐ろしさよりも、Arabella の酷薄振りであり、そしてそれによる不遇な男の死の哀れさであった。恐ろしさより哀れさ、ここに Hardy の「自然主義」の特

徴があるように思われる。

### § むすびに

『ボバリー夫人』で、ヒロインの断末魔の苦しみの死の直後にその場の人々が見せる猥雑な程の退屈なやりとりも、人間の営みへの Flaubert のリアリズムであろうが、とにかくこのヒロインの砒素酸中毒自殺の死の瞬間の恐ろしさ、それから『居酒屋』のクーパーの悲惨なアル中狂乱死の恐ろしさ、更に『ナナ』のヒロインのかつて無数の男の目を瞳らせた肉体が、天然痘によって腐りただれた死体に変化してゆく恐ろしさ、それに『女の一生』の前記不倫の二人の横死場面の恐ろしさ、——つまりはこの世にある恐怖や醜悪の限りを、それぞれの作家は目をそらすことなく、医学的生理学的な冷徹さを以て、しっかりと見すえる。このフランス・リアリズム或いは自然主義の、良かれ悪しかれ科学的冷徹さにはまでは、Hardy は達しなかったように思われる。彼の最も自然主義的作品 *Jude* で描いたものも、結局フランス自然主義リアリズムの恐ろしさよりも、哀れさ惨めさであった。主人公は大学への道を閉ざされ、聖職への道を絶たれ、遂には愛する Sue との幸福の道をも見失う。妻 Arabella に見捨てられて彼は孤独のうちに死んでゆく。折しも幼き日より夢をかき立てられてきた大学の記念祭の歓呼の聲が流れて来る。これ以上惨めな生涯の、これ以上哀れな幕引きはあり得ないであろう。

独特のひねりはあったにしても、牧歌的作品や或いは、奇妙な言い方が「牧歌的悲劇」を書いてきた Hardy が、1880年代後半から社会性の強い、同時に悲劇性の一段と厳しい長篇作品を占くが、それはまた彼の文学に自然主義的色彩が次第に濃くなった時期でもあった。当時ヨーロッパ、とりわけフランスは自然主義小説の全盛期であり、はるか海を隔てた日本でさえ、それが輸入された明治末期には、自然主義に非ずんば文学に非ずという風潮であった。従来ロマンティックな牧歌の世界を舞台にした作品を書いてきた Hardy も、作家歴15年を経て時代の主流的思潮を無視出来ず、或いはむしろ積極的にそれを自作に取り入れようとしたのだと考えられる。本来余裕派を以て自任していた漱石が自然主義的色彩の作品に次第に傾いていったこととそれは軌を一にしている。しかし元来叙情的悲劇性を作品の根底にしていた Hardy が、完全な科学的客観的自然主義に同化することは出来なかったであろう。最後の長篇である最も自然主義的な *Jude* でも、Zola の如く恐ろしい程に自然主義になることはなく、哀れに惨めに、主人公の最後をしめくくった。それは Hardy の自然主義への接近の限度であり、その辺りが元来の彼の作品の悲劇性と19世紀自然主義の接点であったとも言えるであろう。

## Notes

- 1) 斎藤 勇, 『英文学史』(研究社, 1953) p.477参照。
- 2) 同上参照。
- 3) Douglas Brown, *Thomas Hardy* (Longmans, Green and Co., 1954).
- 4) 拙著『ハーディ文学の諸相』(英潮社, 1994), pp.98-9参照。
- 5) V. L. ソーニエ『19世紀フランス文学』(白水社, 1993, 篠田・渋谷訳), p.111.  
ドミニック・ランセ『19世紀フランス文学の展望』(白水社, 1993, 加藤民男訳), p.101.
- 6) 松岡達也・他『自然主義・リアリズム』(三一書房, 1957), pp. 160-1.
- 7) 前掲拙著『諸相』, pp. 41-2参照。
- 8) 例えば *Tess* の中で, ヘロインの肉体的豊熟を Hardy はしきりに母親譲りだとのめかす。それには Zola の『居酒屋』(1877)のヘロイン・ジェルヴェーズの娘ナナが, 母親の形質を受け継いで, やがて『ナナ』(1880)のヘロインに開花し, そして朽ち果てるという前例がある。
- 9) 前掲拙著『諸相』, p.99参照。
- 10) 前掲『自然主義・リアリズム』, p.173.
- 11) 拙著『ハーディの小説—その解析と鑑賞—』(英潮社, 1990), p.26参照。
- 12) *Ibid.*, pp.109-110参照。
- 13) *Ibid.*, 第6章「*The Mayor of Casterbridge*と*Les Misérables*—その比較的考察—」参照。
- 14) *Ibid.*, p.122参照。
- 15) *Ibid.*, pp.123-4参照。
- 16) 作者のもう一人の肯定的人物はヘロインと同じ労働者アパートに住む少女ラリーである。アル中の父親に蹴り殺された母親の代わりに, この年端もゆかぬ少女は二人の弟妹を育てながら, 酔っ払いの父親の不断の虐待と暴力に耐えて, しかし一言も不平をこぼすことなく最後には血を吐いて死んでゆく。
- 17) 前掲『自然主義・リアリズム』, p.173.
- 18) Lord David Cecil, *Hardy the Novelist* (Constable and Co. Ltd., 1954), p.121.
- 19) Albert J. Guerard, *Thomas Hardy* (Harvard U. P., 1949), p.69.
- 20) 前掲拙著『小説』で, *Madame Bovary* の Emma と *The Return of the Native* の Eustacia の類似について扱ったことがある。(pp.59-60)

尚, 本論で英語以外のものからの引用等は, 下記の翻訳を使用している。

- ユゴー 『レ・ミゼラブル』 Everyman's Lib. tr. by L. E. Wilbour (1964)
- フローベール 『ボヴァリー夫人』 岩波文庫 伊吹武彦訳 (1956)
- モーパッサン 『女の一生』 角川文庫 広津和郎訳 (1956)
- ゾラ 『居酒屋』 新潮文庫 古賀照一訳 (1993)
- ゾラ 『ナナ』 新潮社世界文学全集 川口篤・古賀照一訳 (1961)
- イブセン 『人形の家』 新潮文庫 矢崎源九郎訳 (1956)